

来日 10 年目の記録

- ある帰国者三世が振り返った過去から現在 -

永井智香子

(東京学芸大学大学院)

*はじめに

筆者は10年前、ある小学校で中国帰国者に日本語を教えていた。日本語教室があり、必要に応じて子供たちが親学級からやってきてそこで取り出し授業をするというシステムをとっていた。赴任当時、取り出し授業が必要だと判断され、日本語教室に通っていたのは来日して2か月の14才になったばかりの少女ひとりであった(以下Aと呼ぶ)。85年の7月に3人の新しい編入生を迎えるまではAとのマンツーマンの日々であった。

Aは母親の母親、つまり祖母が残留婦人ということで両親と当時6才の弟と4人で13才9か月で1985年1月に来日した。Aは中国では勉強がよくできたが、日本語力がないということで2年おとして小学校5年の終りに編入することになった。

4月からAと筆者の授業が始まったわけであるが、Aと一対一で長時間向かい合っていると、正直言って疲れた。当時の記録(注1)には次のようにある。

「私がこの学校へ来た4月から7月までの3か月間はほとんどしゃべりませんでした。教科書を読む、練習問題をする以外は口を開きません。つまり、会話がなかったのです(中国語でも)。まるで貝のように口を閉じているので陰で“貝ちゃん”と呼んでいました。ほとんどニコリとせず、じっとだまっている彼女と一対一で授業をするのは疲れましたし、負担でした。彼女は教科書の内容は完全に理解していましたし、こちらの言うことも理解していました。ただ口から日本語が出ませんでした」

そして7月、Aは本当に突然と言っていいくらい話し始めたのである。と同時に活発になり、時にはヒステリーを起こし、手がつけられなくなるこ

も度々あった。しかし、相変わらず勉強には熱心で、「将来は日中友好のためになるような仕事に就く」といつも言っていたのを思い出す。

筆者は1年足らずで、小学校の日本語教室の教師をやめたが、赴任から退職までずっと接していたAの印象は強く、やめたあとも心の片隅にいつもAの存在があった。その後、Aとは遠く離れ、いつしか文通も途絶えた。そんなAと10年振りに再会できた。そして、さまざまな話をした。本稿はAの了承を得て、過去を振り返ってもらい、それをまとめたものである(注2)。また、筆者は当時、日本語教室でのことを日記風に記録していた。必要に応じて、“注”を通じて紹介したい。

1、来日前から来日直後

Aはずっとおばあさんが日本人だということを知っていたが、実感はなかったという。そのことで苛められたという記憶もない。父親は技術職。むこうの暮らしはとても楽しかったという(注3)。「ぜんぜんよかったよ。しあわせな子やったと思うわ」。Aは勉強がよくできたので、小学校6年をやらず、飛び級で5年から中学に入り、日本に来る前は中学2年になっていた。そして、日本に行くことを知ったときは「いやな気持ちはなかった。ほな行こか、ゆうかんじ。でも、友達と別れるのがすごい寂しかったぐらい。また違う国行っている人なん見れるねんなあと思うとうれしかった」。日本に着いたときの第一印象は人が少ないこと。「大阪空港出て、そこからタクシー乗って、そのときは覚えてる。すごい人がいいひんになって、人が歩いてへんになって…。車でおばあちゃんとかまで行ったから、中国やったら人が多いから、静かやなって思っただけ…」。

A一家はおばあさんのいる京都の団地に落ち着く。本来の年齢なら日本の中学1年だが、小学校5年に入ることになった。そのいきさつを次のように話す。「あんね、はじめね、中学校も行ったんよ。で、テストとかいろいろ中学校でまあこのくらいの知識をなあ、知っというてもらおうゆうて、なんかそういうテストみたいなのされて…。私、“あいうえお…”なんてなんも知らんから、当然できへんし…。そら、算数はできたけど、算数はできてても国語できへんかったらあれやし、ほんで、2年留年して、で、小学校でちょっ

と勉強してから中学校入るかゆうて...」。中学校で飛び級も経験したのに、小学校に入ることに抵抗はなかったかと聞いてみると「あった。でも、プライドじゃなくて、普通の同じ年の子と一緒に勉強していきたいなと思っただけで...」（注4）。

2、小学校生活

Aは一日の大半を日本語教室で日本語を勉強して過ごしていた。Aはほとんどしゃべらなかつた。日本語をならっていても、必要なことに蚊の鳴くような声で答えるだけで、ニコリともせず、じっと座っている。じっと押し黙っているが、吸収力はあった。ただただ、口から日本語が出ない、出さない。今振り返っても日本に来てから一番つらかったのはそのころだったと思われる。「最初に日本語わからへん、しゃべれへんとき...。もうなんか、なんでしゃべられへんのやろと思って、自分のクラス入ってから、まわり皆わけわからん言葉しゃべって...。で、自分だけわからへん状態のなかで、なんかわからへんようなことばかりして、そんなん思ったよ。やっぱり帰りたいな思って...。苦しかったなあ、ほんとよ。学校では泣いたりしいひんかったけど、帰ってから、やっぱり涙流したりしてたよ。しゃべれへん、しゃべれへんゆうて...」 学校では静かだったがAは日本語を頑張っていた。「勉強はしてたよ。おもいきりしたな。した、した、した。そら、ワーッと書いたりしたあ。でも、私そういう勉強よりもテレビを見て勉強した。テレビでわからへんかったら、辞書ダーッと調べて、あっ、これはこういうんや、こういうときはこういうんやって...」（注5）。来た年の7月、つまり、日本に来てから半年たったころから急に日本語を話し始めた（注6）。半年間の沈黙の理由について「あのときは中途半端にしゃべんのわからへんやない、相手にとっても...。そやから完璧に覚えてからしゃべったる思って...。しゃべれんねんけど、自分もわけわからへんやんか、単語でしゃべっても、むこうもわからへんし...。こんな状態続いてもわけわからへんし何もしゃべらんほうがええやん思って...」（注7）。こうしてAは着実に日本語を身につけていき、日本に来て10か月ぐらいで授業にも十分ついていけるだけの日本語力があつた。6年生の終りごろには国語や社会でも80点以上とれるよう

になっていた。短期間で日本語を、身につけることができた理由をきいてみると「自分自身の戦いやね。クソ - ッ、やったろいう自分の性格やな。全部、今まででもそうちゃうかな。やっぱり、なんで、人にできて、自分にできへんのんやと思うわ」という。やはり、相当な努力をしていた。勝ち気である。

3、中学生生活

団地の中にある中学校に進む。そこにも日本語教室があったが、最初少し行っただけで、もう行かなかった。同じ団地にたくさんいた中国から来た友達ともあまりつきあわなかった。とにかく、はやく日本の生活により溶け込みたかったのだと思われる。Aは授業についていけるということだけに満足せず、中学校に入っても勉強を頑張った。たとえば、「国語の読み取り、あした、もし、先生が誰に読ますかわかれへんから、予習してこい、漢字読まれへんのんちゃんとしてこいいうやん。普通日本の子やったら何もせえへんやんか。もしや自分があたってるとき、読めへんかったらかなわんし、それは、ちゃんと家帰ってから自分で調べてた。それは、ちょっと苦労あった。自分で勉強してた」。

4、高校生活

府立高校にすすむ。中学校も結構楽しかったが、高校生活はもっと満喫できた。クラブにも入らず、放課後や土、日は友達といろいろなアルバイトをした。「えっとね、まず最初はクリーニングやさんとかね、てんぷらやさん、レジ、ケーキやさん、パンやさん、もういろんなんしてた」。Aは今まで自分が中国人だということを隠そうとしたこともない。まわりは皆Aが中国人だということを知っていた。「知ってるよ、みんな知ったはるよ。そういう意識を持ってくれはれへんな。だって、皆普通に接してくれはるし、私が中国から来た子やゆうて気いつかうゆうのしはらへん。だから、私せえへんのやるな。妙に皆意識してくれて、あの子こうやからゆう、そんなんはなかった」。高校では日本語で苦しんだことは全くない。成績もよかった。「古典がね、意外と古典が成績よかってん、国語よりも…。ほんまや、通知表みせてあげたいね。英語はよかった。あのね、私、いちばんあかんかったんが理

科、科学とか...」。

高3になって、進路を決めるとき、成績もいいので、周囲は大学進学をすすめた。「大学って勉強するところっていうイメージすごくあるから...」という理由で行くことは考えなかった。Aにとって日本の大学生は勉強しないで遊ぶというイメージしかない。どうしてそう思うようになったのかというと「まあ、みかけやなあ、テレビでしゃべってることとか、大学出て、こんなことしかしゃべりよらへんのか」と思ったから。そこで、中国の大学生はどうなのかきいてみると「違うよ、もっとしっかり、もう、こう、しゃべらはるよ。私はあんまりしらんけど、でも絶対違う、めちゃくちゃ大人や思うわ」つまり、Aが大学へ行きたくないと思ったのは大学へ行っても勉強できないと判断したからである。

そこで、就職ということになったが、中国語が使えるところがいいと思い、旅行社を希望した。しかし、進路の先生に問い合わせてもらったところ、高卒では難しいということで断念せざるを得なかった。次に中国語が使えるところで思いついたのがホテル。「ホテルでそんな仕事についたらええなあ思って...。京都やから、何件かえらんで、給料のええところ」。こうして、Aは京都では大手のホテルに就職を決める。就職の際、外国籍ということで差別を受けたことはなかった。「私はないけど、最近そんなんあるみたいやなあ」。

5、就職

希望に胸をふくらませて入ったホテルであったが、「思ったことぜんぜんあかんかった」。給料は安く、中国語を使う機会などまったくなかった。「調べへんかった。しまったなと思ったな。自分が行きたかったのはページ、それもあかんかった。ラウンジやった」。しかし、いいこともあった。Aはホテルでの研修中に現在の夫に出会う。14才年上のホテルマン。日本人である。Aの両親もむこうの両親も国際結婚に反対しなかった。「むこうの親は私については何もいわはらへんけど、子供のことちょっと心配してはったな。もし、子供生まれたら、そういう苛めないようにあんたたちはせなあかんて...。反対はしはらへん。そういう忠告はあった。

6、結婚、退職、妊娠

約2年ホテルに勤め、結婚と同時に退職。結婚式では披露宴でチャイナドレスを着ることができたのがうれしかった。「そら、やっぱり、日本人が着物着るような感じじゃないかなあ。もちろん、成人式で着物着たときもはじめてこんなもん身につけてうれしかったけど、チャイナはよかったなあ」と感慨深げ。中国と日本の国際結婚である。文化摩擦などあるのではときいてみると、のろけともつかぬ答えがかえってきた。「結婚して1年か。あるかな、ないかな。私がかわってるのか、彼がかわっているのかようわからへんけどな。困ったこと、困ったことね…。初めお料理やったんかなあ、困ったことは…。最初、やっぱり、日本料理できへんかったから、作れへんのがあって、彼に食べさせられへん、っていうのもあるやない。でも、今はぜんぜん、彼が合わせてくれてるから、たとえば、どんなんやろな、無いな、わからへんわ…」。

Aは間もなく母親になる。生まれてくる子には中国語を教えるかときくと「絶対教える、それは絶対」ときっぱり言う。その理由をきいてみると「なんで教えんねんやろな。やっぱり、日本で生きていくうえで日本語だけではねえ。まあいいんやけど、日本人やったら、でも、せっかく私も中国語しゃべれるんやったら教えてあげたい…。もちろん、言葉を教えていくうえで、習慣とかも全部教える、子供には…。決めてる」。そのことに対して夫も理解を示し、「そう教えて言いはる。全部おまえがしてきたことを全部教えていいはる」。

7、現在辿りついているA自身について

今自分で何国人やと思うときくと迷わず「中国人」と答える。スポーツの試合で日本と中国が戦ってたら「そら、中国やわ、絶対かわらへん、なんでわからへんな。だから自然に応援してしまうんや。だから何かあって応援するんやなくて、もう頑張れ中国って。だから、オリンピックとかあるやんか、金メダル何個とったとか、すごいなあゆうて…。中国人であることに誇りを持っているかという質問に対しては「そうや、そういう誇りもってる

よ。一番最初にオギヤージュで出て来た国が中国やからな」。自分が何国人なのかと迷ったことなどない。「マイペースやで、結構。そんなん自分が何者やって迷ってたらあかんと思う」。

今、帰化申請中。本人の意思ではない。「私、別に、別に、お母さんやね。親やね。お母さん、お父さんもたぶんこっちで生活すると思うから、やっぱり、将来的に私のことそのとき考えてくれたと思うんよ」。やっぱり、中国籍から日本籍になるのは抵抗があるという。「そら、さびしいものがあった。書類とか書いていると…。でも、ずっとこっちで生活するんやったら…。そんでも、今時点で日本人になったから日本人になるわけやないから…。とにかく、帰化をして籍は日本人になっても、中国人であることには変わらないと思っている。

Aは「中国語一切生活のうえではしゃべっていません」という。夫は全く中国語ができないので当然といえば当然。「旦那に教えてんねんけど、中国語ぜんぜん無理やね。ぜんぜん無理や。ぜんぜんやね。ぜんぜん興味もないね」。一切しゃべってないといっても「実家の母親と話すときは中国語半分、日本語半分、父親とは中国語だけで話す。弟とは全部日本語」。7才年下の弟はもうほとんど中国語を忘れてしまっている。そんな弟のことを「みんな友達日本人ばかり、私みたいに中国の友達っていいひんもん」という。もう弟さんは日本人になったのかときくと「うん、なっとんな、しょうもない」と嘆く。

Aは今中国語に自信がない。日本語のほうに気をとられているうちに随分忘れてしまった。「新聞はたぶん読めない。手紙も書かない。うん、書けへん。しんどいねん書くの。日本に来て2、3年ぐらいは書いてたけど、それっきりじゃないかな。しゃべるのはしゃべれる。でも勉強しようと思うねんけどな、その気力が今ちょっとダウンやね。中学校、高校時代は日本語ばかり覚えよ思って、心が奪われてるのがあったんとちゃう。でもな、ちゃんと勉強してな、中国語の技能検定受けようと思ってたんやで、ずっと…。問題集とかちゃんと持ってんねんで…。しかし、弁解もする。「今でもあれやで、全部忘れたわけやない。お母さんから電話あって、ダアーツと中国語でしゃべるやん。電話きって旦那がいるとするやん。ほな、フツって中国語で

しゃべってるときあるもん。寝言は中国語らしいわ私、寝言は...」。今度生れてくる子供に中国語を教えながら、自分も勉強したいと思っている。「忘れないために自分の子にしっかり教える。一緒にまた勉強すんねんなまた、自分の子大きくなってからも。自分の子は中国語と英語の“サンリンガル”にする」。

言葉には少し自信をなくしているが、自分は日本人とは違うという自覚がある。「なんかものごとに対して判断するとき、はっきりゆう...。会社でも、この子ははっきりしすぎて、自己主張とか強いつて言われるな。だから嫌いなものは嫌いとか」。また、中学、高校と日本人の友達とつきあってきて、違いをかんじることもあった。「悪口、日本の子平気で言うやんか。まあ3人いたら、Aの子とBの子くっついたらCん子の悪口ゆうとか。そんなたまらんな。それゆうんだったら、はっきりC子にゆうたたらええと思う。こんな裏表やなあ。それに、日本人って本気でおこらはらへんやろ、友達同士でも...」。Aにとってはまだ日本の建て前と本音が理解できない。さらに、「日本人ってみんなちゃらんぼらんや、そのへんの女の子って、なんか頭からっぽちゃうかなと思う。だから、やってること、テレビでよう見るやんか、実際はわからへんけど...。中国人はもっとしっかりしてると思うで。だから自分の意見ちゃう、こう、思ってることをこうやゆうて...」。では、そういう“ちゃらんぼらん”なタイプの日本人とは一切つきあわなかったのかというと、表面上あわせていたこともあったという。「でも、あわしてる時もあったでも、自分の中ではちゃんと自分のものを持っていた。しっかりとなくさないように...。私AB型やねん、困みに。だから、そういうときもあるけど、こういうときもあんねん。でも、自分というものをしっかりもってるから大丈夫やねん、流されへんねん」。

今の中国についてどう思うかときいてみると「私、知らない、だって、ぜんぜん帰ってないもん」。テレビで見ないのかというと「見いひんもん、NHKなんか見いひんもん。上海が、私、上海知らへん」。友達に関しては日本人の親友と言える友達もいるが、心底心が許せるのは同じ時期に中国から来た同じ年の友達。将来の希望は「いいお母さんになって、しっかり教育すんねん、自分の子。やっぱり、そこらへんの日本の子と違った子に育てたい

なあと思う。もっと私ができへんかったことな、さしたいなと思うな。中国語を生かした仕事をしたりとか、よくゆうやんか21世紀は中国の時代やゆうて…。まあ子供はどう思ってるかわからへんけどな…。このように言っているが、本音は「私も働きたい。社会にでて、できれば、中国関係の仕事したいな」。日本に来てからいちばん楽しかったことは「結婚。結婚っていうか、結婚に至るまで、旦那さんとうちやって会って、生活楽しい。こういう好きな人と、生活、楽しい」。Aは今幸せである。

注

- 注1 当時、教職員の日本語教室への理解を深めるために「日本語教室だより」というB4で2枚程度のペーパーを2か月に一度程度配っていた。その中からの抜粋である
- 注2 インタビューはすべて録音し、書き起こした。本稿は書き起こしたものを編集し直したものである
- 注3 当時の日記（85年8月）には“ Aは中国では学校の行き帰りの電車の中でスターの話をしたり歌を歌うのが一番の楽しみだった ”とある。
- 注4 当時の日記（85年9月）に次のような記述がある。“ Aは中国語でわめいていた。そしてヒステリーを起こしている。そして、日本語で「中国帰りた～い。中国の友達は今9月から中学3年生、私は小学生」 ”
- 注5 当時の日記（85年8月）にもこの発言を裏付ける次のような記述がある。“ 今日、たまたま新聞を持っていたので、新聞を見ながらAと話す。彼女のテレビっ子ぶりにひたすらびっくりする。テレビ欄を見ながら私が「今日何にもおもしろくないなあ」と言うと「うっそお、いっぱいあるよ。まず、『中国語講座』『連想ゲーム』『スター誕生』 ”

『不良少女』... (中略) さらに彼女が見せてくれた自由帳には、英語と日本語の単語がびっしり。「両方勉強できるでしょ」とすましている...”

注6 Aが突然しゃべり始めたときの様子について、注1で紹介した「日本語教室だより」には次のようにある。“...忘れもしません。7月6日(土)のことです。ナントナント突然と言っていいくらいしゃべり始めました。その日から語尾に「～ネ」「～ヨ」つまり、「そしてね」「わかるよ」ととても会話らしい言葉が使えるようになりました。それからもうすごいスピードでペラペラしゃべり出したのです。最初のうちは躁病かと気持ち悪く、素直に喜ばませんでした。しかし、躁病ではなかったこともわかりました。そして、とうとう反抗したり、にくまれ口をはじめてたたいたときなど、激しく感動したものでした...”

注7 「日本語教室だより」によると、Aがずっとだまっていた理由について次のような記述がある。“...ある日きいてみました「Aちゃん、どうしてあんなにだまっていたの」と。すると、その答えは思った通りでした。つまり、日本語の教科書で勉強する日本語とまわりの友達が使う日本語との間にギャップがありすぎたということでした...”

今回のインタビューの答え「完璧に覚えてからしゃべったろ...」というものとは一見異なっているようであるが、教科書の日本語と京都の方言の違いにとまどいながらAは日本語をじっと観察し続けていたのだと思われる。